

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00611

研究課題名(和文) 現代バスク語諸方言の音韻と文法の記述 ～地域差と世代間差の二つの側面から～

研究課題名(英文) Description on grammar and phonetics in some dialects of modern Basque. ~ differences among regional and generational varieties ~

研究代表者

吉田 浩美 (Yoshida, Hiromi)

神戸市外国語大学・外国学研究所・客員研究員

研究者番号：70323558

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：スペイン領バスク自治州ギプスコア県ウラ・コスタ地方の4つの自治体であるアスペイティア、アスコイティア、セストア、サラウツで話されているバスク語の地域変種について、各地域変種内の世代間に見られる相違点を明らかにするために、各地域変種の親世代、子世代の母語話者への面接質問調査を行った。その結果、子世代では共通バスク語の読み書きに幼少時から接していることが一因となり、あらゆる側面において共通バスク語寄りに変化していることが観察された。すなわち子世代においては地域方言間の差が親世代に比べ小さくなっている。ただしアクセントに関しては地域ごとの特徴が保たれており、世代間の差は極めて小さいことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回は現代バスク語の地域変種間の相違を縦系に、世代間の相違を横系にして、その相違を明らかにすることを目的とした。従来の研究では地域変種の相違に着目することが多く、世代間の相違はそれほど取り上げられて来なかった。共通バスク語による学校教育が軌道に乗って親世代と子世代における教育言語が変わってから40年ほどが過ぎた今、隣接する威信言語であるスペイン語の影響だけでなく、共通バスク語のバスク語地域方言への影響も着目に値するものであり、言語環境が時代とともに変化したことを考慮すると、世代間の相違に視点を置くことは意義深い。そのような観点から今回の研究は現代バスク語の諸相を知るために資するものを考える。

研究成果の概要(英文)：The research was done in 4 communities in Gipuzkoa province, the Basque Autonomous Community, Spain：Azpeitia, Azkoitia, Zestoa and Zarautz. In each community they have different dialects. The linguistic consultants are of 2 generations, 50 - 60 -year-old ones, and 20 - 25 -year-old ones. In the younger speakers' varieties, the differences between each one's dialect and the standard Basque are smaller than in those of elder speakers. Younger speakers are used to the standard Basque from childhood, maybe it is one of the reasons of the phenomenon. On accents, however, difference between the generations is very small in 4 dialects.

研究分野：言語学

キーワード：バスク語 地域変種 世代間変種 文法 音韻

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

私はバスク語の方言の調査をおもに行なって来たが、長年バスク語の研究に携わる間に、地域変種だけではなく、同一地域変種内における世代間の違いにも着目するようになった。世代間の違いは、語彙・音声・文法のあらゆる側面にわたって観察される。バスク語はもともと地域変種の豊富な言語であるが、地域ごとの違いを縦糸に、世代間の違いを横糸にして方言記述を行うことにより、当該の方言の諸相がより明確になるのではないかと考え、いくつかの方言における世代間変種を調査することを思い立った。世代間とは、今回は 50 歳代～60 歳代の「親世代」と 20 歳代の「子世代」を調査対象とした。

2. 研究の目的

スペイン領バスク自治州ギブスコア県内のウロラ・コスタ地方にある諸方言における、地域差と世代間の差を記述することが目的である。世代間の違いを明らかにするために、50 歳代～60 歳代の「親世代」と 20 歳代の「子世代」を調査対象とした。調査地域は、上記の地域内にある、アスペイティア、アスコイティア、セストア、サラウツの 4 つの自治体とした。

3. 研究の方法

上記の各自治体において、親世代と子世代の linguistic informant を 1 名以上ずつ確保し、対面質問形式で調査を行う。

4. 研究成果

4 つの方言と二つの世代について、次の事柄を調査した：

助動詞の形態、およそ 400 の動詞語彙、およびそれらの動詞と助動詞の共起関係、再帰代名詞、指示代名詞、指示詞の用法、名詞句のアクセント。

・バスク語アスペイティア方言：今回もっとも研究が進んだ地域である。上記の①～について二つの世代について調査した。また、この方言に関しては、スペイン語からの引き写しの表現をどの程度容認できるか、ということに関する調査も行なった。

・バスク語サラウツ方言：子世代については上記の について調査を行うことができた。親世代については について調査を行なった。

・バスク語セストア方言：子世代については上記の について調査を行った。親世代については について調査を行なった。

・バスク語アスコイティア方言：子世代については について調査を行なった。親世代については について調査を行なった。

助動詞の形態：世代間の大きな違いはどの方言にも見られないが、その中でもアスペイティア方言においてもっとも違いが大きい。おおむね、子世代では共通バスク後寄りに変化して来ているのが観察される。他の方言は、アスペイティア方言に比べてそもそも共通バスク語により近い形態を持っているので、もし若者の傾向が共通バスク語寄りになっていくものであるとすれば、それほど変化は目立たないと考えられる。

動詞語彙：どの方言でも、おおむね、共通バスク語寄りの変化が観察される。その反面、親世代が使っていないスペイン語からの借用語彙も増えていることが観察される。

動詞と助動詞の共起関係：規則的な用法については世代間の違いはほぼ見られない。不規則的な用法においては、規則的な用法への移行がいくつかの動詞において観察される。

再帰代名詞、指示代名詞、指示詞の用法：そもそも「これ・それ・あれ」の 3 系列であるが、いくつかの格や副詞的表現においては、親世代においても子世代においても 2 系列になっていることが観察される。再帰代名詞においては、おおむね子世代において使用率が低めであることが観察される。

名詞のアクセント：どの方言においても世代間に大きな差はなく、地域間の左の方が大きくなっていることが観察される。

スペイン語からの引き写しの表現をどの程度容認できるか、については、アスペイティア方言の話者の協力のもと行なった。おおむね、親世代は容認度がたいへん低く、子世代においては容認度が上がっていることが観察される。これは共通バスク語の書き言葉で多用される構文であり、幼少時から共通バスク語による読み書きに接している子世代は、通バスク語の書き言葉に慣れているため、このような構造に対する容認度も上がると考えられる。が、親世代は、共通バスク語による読み書きに習熟している方でも容認度が下がる。これは、共通バスク語による読み書き「幼少時から慣れているか」と「成人してから習得したか」の違いが関わっているかもしれ

ない。

大まかな結論としては、これらの4方言について、世代間の劇的に大きな違いは見られない。変化が見られる面については、子世代においておおむね共通バスク語寄りに変化して来ていると言えよう。その原因として、幼少時からの学校教育をスペイン語で受けて来たか、バスク語で受けて来たか、が考えられる。が、個々の意識（共通語と地域変種の峻別を意識的に行っているか、など）の違いにも起因すると考えられるので、調査協力者を増やして調査することも視野に入れねばならない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉田浩美	4. 巻 CSELシリーズ24.
2. 論文標題 バスク語アスペイティア (Azpeitia) 方言の助動詞と動詞語彙に関する世代間の相違	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 CSELシリーズ24. ユーラシア諸言語の動態IV 言語接触・混成言語・言語生態	6. 最初と最後の頁 177 - 196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉田浩美	4. 巻 21
2. 論文標題 スペイン領バスク自治州の4自治体における高校生のバスク語の使用状況 社会的側面と文法的側面から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CSEL Series	6. 最初と最後の頁 177 - 213
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉田浩美
2. 発表標題 最新のフィールドワークから (バスク語アスペイティア方言)
3. 学会等名 ユーラシア言語研究コンソーシアム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉田浩美
2. 発表標題 バスク語アスペイティア方言の助動詞に関する世代間の差異
3. 学会等名 2021年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉田浩美
2. 発表標題 バスク語（アスコイティア方言とセストア方言）の複合名詞のアクセント（中間報告）
3. 学会等名 2020年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 吉田浩美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 168
3. 書名 ニューエクスプレスプラスバスク語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関